様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：８４６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ００８４３

研究課題名（和文）古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究

研究課題名（英文）An environmental archaeological study on restoration of dietary habits in ancient times

研究代表者
山崎　健（Yamazaki, Takeshi）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・室長

研究者番号：５０５１０８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：遺跡出土の動物遺存体などの食料残滓から、古代における食生活の実態を明らかにした。古代では木簡や延喜式によって日本各地から都へ貢進された貝類が具体的に判明しており、アワビを中心とした岩礁域で採集できる貝類に集中することが知られている。一方で、ハマグリやマガキ、アサリなど大量に採集できる貝類は、木簡や延喜式にはほとんど見られなかった。そこで、上総・下総国域を事例として、地域における貝類利用の実態を検討した。沿岸部ではマガキ、ハマグリ、シオフキなど集落周辺に生息する貝類を採集・消費しており、海岸環境の違いを反映して多様性が認められた。また、大量の殻付き貝類が陸路で内陸部まで運ばれていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで奈良時代の食事は、貴族食と庶民食が分離し、都の豪華な貴族食に対して、地方の庶民食は粗末であったと対比的に説明されてきた。今回の成果として、史料自体がほとんど残っていない地方における食の研究が特筆される。多様な食の地域性や国・郡を越えた流通、地域における食の階層差など、単に「粗末」だけでは表現しきれない食の実態が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：I studied food remnants, such as animal remains excavated from the sites, to elucidate dietary practices in ancient times. Ancient people used to pay taxes in the form of shellfish. Therefore, records of shellfish transported to the ancient capital remain. However, there are almost no records of shellfish eaten by local people. I analyzed the remains of shellfish excavated from the ruins to study the use of shellfish in the ancient provinces of Kazusa and Shimousa. Coastal people generally collected and consumed shellfish living around the settlements. Shelled shellfish were also transported across countries and provinces.

研究分野：動物考古学

キーワード：古代　食　動物遺存体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

古代の食生活の復元は、文献や木簡などの文字資料が中心であった。その中で、藤原宮や平城宮を中心に出土した食料残滓の分析により、文字資料として残りにくい食生活の実態を明らかにしてきた。

例えば、出土したマダイの骨に残された切断痕跡や解体痕跡を詳細に検討し、真鯛の頭部を細かく割って、汁物などの料理に用いられたことを明らかにした。また、寄生虫卵の分析から、刺身のように魚を生で食べる食習慣が藤原京や平城京に広く存在したことを指摘した（山崎健 2012「藤原宮造営期における動物利用―使役と食を中心として―」『文化財論叢Ⅳ』）。さらに、天皇の食料を献上する御食国である若狭国の浜禰遺跡から出土した動物遺存体を分析して、貢進された魚介類の品目が律令以前から共通した伝統であったと論じた（山崎健 2015「若狭の漁撈と製塩－浜禰遺跡における酒詰報告（1966）の再検討－」『若狭の塩、再考』）。

２．研究の目的

これまで進めてきた研究を発展させ、従来の文字資料における研究成果と考古学資料による研究成果を融合して、古代における食生活を総合的に解明することが本研究の目的である。

３．研究の方法

古代の遺跡から出土した食料残滓を分析するとともに、食料残滓の出土事例を全国的に集成して、食生活の地域性や階層性を検討する。そして、資料特性を考慮しながら「遺跡出土資料による研究成果」と「文字資料による研究成果」を比較検討することによって、古代の食生活を多角的に考察する。

４．研究成果

古代、貝類は全国から中央へ貢納された。とくにアワビは重宝され、神饌や給食へ支給されていた。荷札木簡や延喜式にみえる貝類は、アワビ以外でもサザエやイガイといった外洋の岩礁域に生息する貝類が多く、実際に藤原宮跡や平城宮跡からアワビやサザエなどが出土している。一方、ハマグリ、マガキ、アサリといった資源量の豊富な貝類（大量に採集できる貝類）は、風土記や万葉集、日本霊異記にはみえるものの、荷札木簡や延喜式では非常に少なく、都へほとんど貢納されていない。こうした貢納されないものの、地域では消費されたと考えられる貝類の動向を検討することで、「中央へ貢納するための生業活動（アワビ・サザエなど）」ではなく、「地域で消費するための生業活動（ハマグリ・マガキなど）」という地域史の解明が期待される。

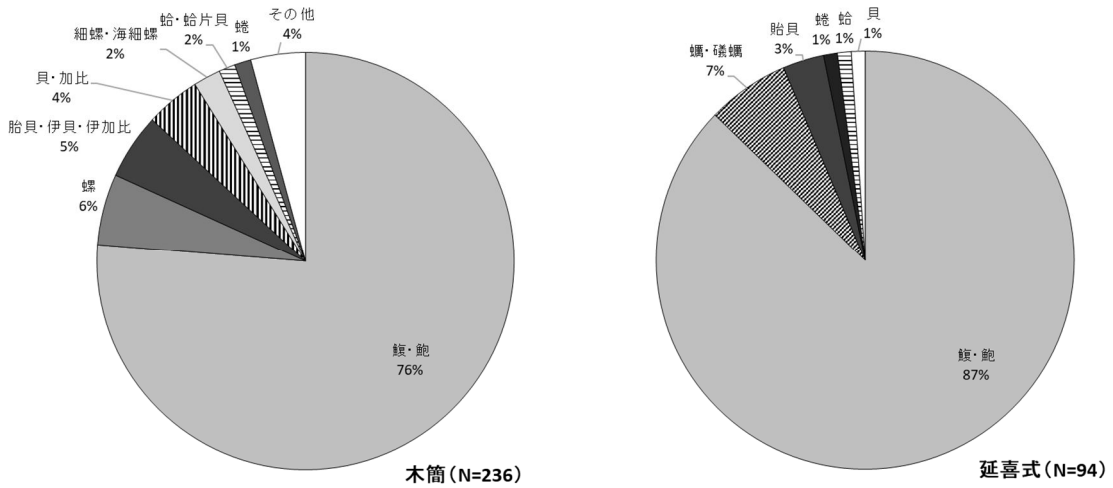

図１　都へ貢納された貝類

そこで、遺跡出土の貝類遺存体が豊富な千葉県域を対象に発掘調査報告書を集成し、とくに貝類の出土事例が集中する上総・下総国域を中心として、地域における貝類利用の実態を明らかにした。また、古代以前の出土資料もあわせて分析することにより、令制以前からの継続性や断続性も検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。

・91 遺跡の 565 遺構から古墳時代中期～古代の貝類遺存体が出土しており、約 64 万個体の貝類が報告されていた。
・沿岸部では、基本的に集落周辺に生息する貝類を採集・消費していた。東京湾東岸では、市川～習志野市域でハマグリ・マガキ・シオフキが多く、千葉・市原市域でイボキサゴの比率が高かった。太平洋側では、岩礁沿岸の集落はサザエやスガイ、砂浜沿岸の集落はダンベイキサゴやチョウセンハマグリが主体であった。
・太平洋沿岸から東京湾東岸、東京湾東岸から印旛沼周辺、九十九里南部、関東内陸部へと殻付きの貝類が運ばれており、貝類は国・郡域を越えて広く流通していた。
・古代の都にはアワビを中心とする磯物を重宝する価値観が存在していたが、地域においても、新鮮な海産貝類を重宝する価値観や貝類利用の階層性が存在した可能性がある。
・祭祀遺構から出土した貝類は、その地域で主体的に出土する貝類であった。そのため、祭祀には日常的に食べている貝類を用いていたと考えられる。
・儀礼や饗宴などが想定される大量廃棄とみなせる貝類の出土状況は、実際には長期間にわたる廃棄による集積の可能性があり、慎重に議論する必要性がある。
・今後の活用例として、奈良時代における国・郡ごとに貝類を記載した。

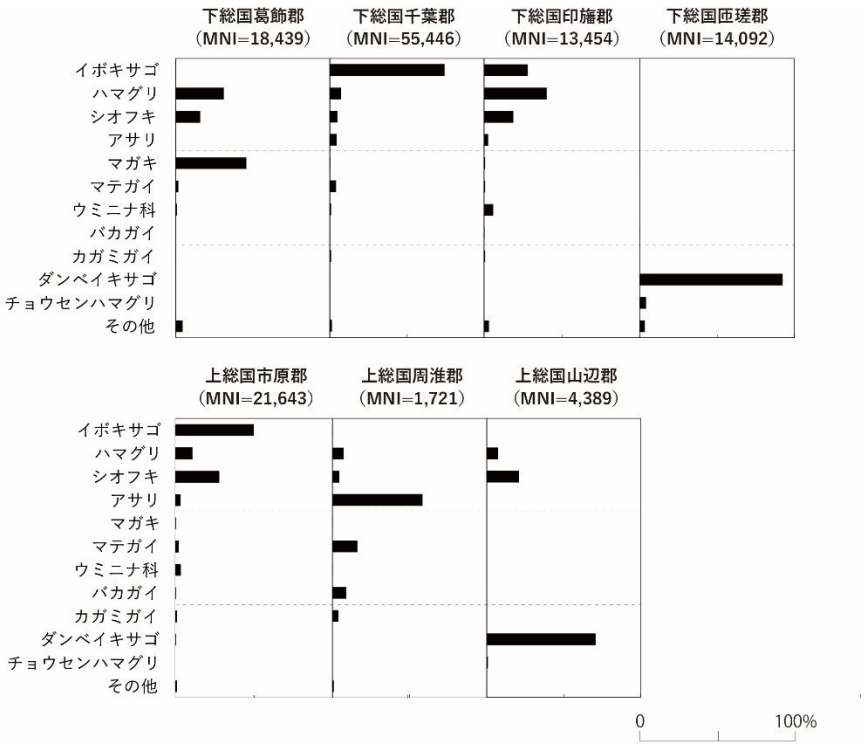

図２　奈良時代における上総国・下総国の出土貝類

また、一般向けの展示や講演を通じて、学会発表や論文投稿とともに、得られた研究成果の社会還元や普及啓発を積極的に進めることができた。

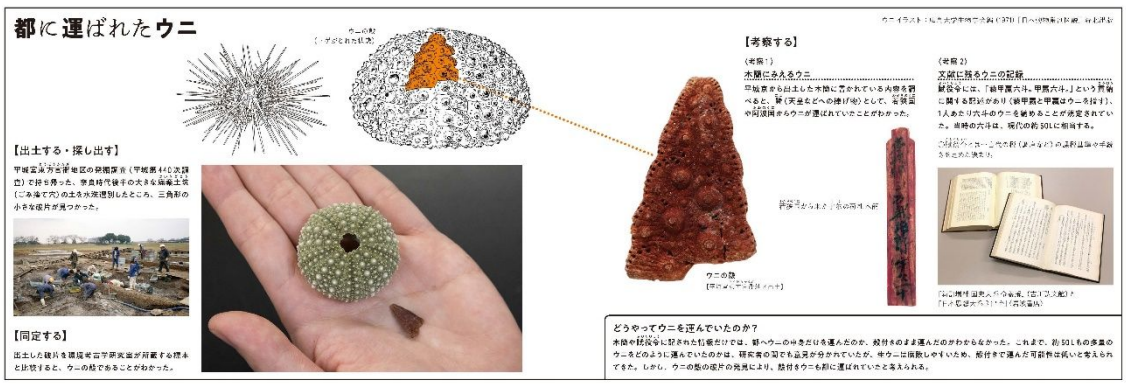

図３　研究成果を紹介した展示図録

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 山崎健	４．巻 2
２．論文標題 上総国・下総国の貝類利用－地域における生業研究の一試論－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 奈文研論叢	６．最初と最後の頁 67-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山崎健	４．巻
２．論文標題 藤原宮造営と馬	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『馬の考古学』雄山閣	６．最初と最後の頁 126-128頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山崎健	４．巻 856
２．論文標題 平城宮跡から出土したウニの殻	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本歴史	６．最初と最後の頁 57-58頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山崎健	４．巻 -
２．論文標題 古代における馬の大きさ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 平成30年度はにわ館特別展『人とともに生きた馬』展示図録	６．最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎健	4．巻 -
2．論文標題 古墳時代の鹿角利用	5．発行年 2019年
3．雑誌名 古墳人、現る―金井東裏遺跡の奇跡―	6．最初と最後の頁 78-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎健	4．巻 -
2．論文標題 金井東裏遺跡出土の骨角製品（武器・武具・工具）の素材同定	5．発行年 2019年
3．雑誌名 金井東裏遺跡≪古墳時代編≫理学分析編・考察編	6．最初と最後の頁 72-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎健	4．巻 33
2．論文標題 馬の貢進・貝の貢進	5．発行年 2018年
3．雑誌名 条里制・古代都市研究	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎健	4．巻
2．論文標題 馬の生産と消費―金井下新田遺跡と藤原宮跡から出土した馬の比較―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 群馬県立歴史博物館グランドオープン記念第93回企画展『海を渡って来た馬文化―黒井峯遺跡と群れる馬―』企画展示図録	6．最初と最後の頁 176-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 東京湾東岸における律令国家形成期の貝類利用
３．学会等名 近江貝塚研究会第321回例会（online）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 ホネ考古学―古代の都の動物利用―
３．学会等名 東京都埋蔵文化財センター企画展示「リケイ考古学」第２回文化財講演会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 古代房総における貝類利用の実態
３．学会等名 日本動物考古学会第7回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 動物遺存体からみたサケ
３．学会等名 海洋考古学会第10回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 骨からみた古代の馬
３．学会等名 松阪市文化財センターはにわ館秋季特別展『人とともに生きた馬』講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 国家形成期における哺乳類利用
３．学会等名 近江貝塚研究会第301回例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 骨からみた古代の食文化
３．学会等名 東京医療保健大学食文化論特別講義（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 古代における貝類利用の実態―房総地域の事例研究―
３．学会等名 第288回近江貝塚研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 古代都市部における動物利用―都市で利用された動物と人の関わり合いについて―
３．学会等名 金沢大学公開講座「動物骨は語る―縄文から近世までの人々と動物たち」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 山崎健
２．発表標題 藤原宮・平城宮における動物利用
３．学会等名 若手研究者セミナー「ユーラシア世界における動植物利用の拡散―生物考古学最前線―」
４．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

１．著者名 山崎健	４．発行年 2019年
２．出版社 六一書房	５．総ページ数 315頁
３．書名 農耕開始期の動物考古学	

１．著者名 小沼美結・山崎健・西田紀子	４．発行年 2019年
２．出版社 奈良文化財研究所飛鳥資料館	５．総ページ数 143頁
３．書名 骨ものがたり―環境考古学研究室のお仕事	

１．著者名 小沼美結・山崎健・松崎哲也・山田凛太郎・坂本匠	４．発行年 2020年
２．出版社 奈良文化財研究所	５．総ページ数 16頁
３．書名 研究を身近に感じてもらう取り組み―「骨ものがたり」展のイベント記録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関